

フィヒテ著『フリードリヒ・ニコライの
生涯と奇妙な意見』（1801年）(6)

勝 西 良 典

解題

以下に訳出するのは、ヨーハン・ゴットリーブ・フィヒテ著、A・W・シュレーゲル編『フリードリヒ・ニコライの生涯と奇妙な意見。前世紀の文学史ならびに幕開けしたばかりの今世紀の教育学に関する論考』（*Friedrich Nicolai's Leben und Sonderbare Meinungen. Ein Beitrag zur Litterargeschichte des Vergangenen und zur Pädagogik des angehenden Jahrhunderts*, 1801）の第1付録である。底本には、アカデミー版全集（*J. G. Fichte — Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, Reihe I, Bd. 7, hrsg. von Hans Gliwitzky und Reinhard Lauth, Stuttgart 1988. 以降, GA I/7 と略記）所収のテキストを用いた。訳文中の〔 〕は訳者による補足であり、訳文の欄外の数字はこの版のおおよその頁付けを示している。また、原注は章末に、訳注は脚注として示している。

訳文

429 第1付録（序論に対する付録） 筆者個人の名譽と性格に対するニコライの毀損行為は次のような立場を含んでいる

1

シェリング氏とシュレーゲル氏が自分たちの著作に関して好意的な評価をしているものを『イェーナ文芸新聞』に載せようと努めたことを弾劾した^{訳注1}あと、ニコライは、(先に挙げた紹介書評の159頁[以下]で)

^{訳注1} Vgl. *Neue allgemeine deutsche Bibliothek*, Bd. 56, S. 159. 「著者として自分の本の書評者を自分で選びたいと思うどころか、その上自分の弟子を書評者に推薦するとは、そもそもシェリング氏は大いに不適切なことが何たるかまったくわかっていないようだ。書評とは、中立で予断のない判断でなければならない。しかしながら、書評者が著者の監督下で書いていることを知っているのだとすれば、そんなことはまったく想定しようもないことである。ましてや、ほんの数週間前まで自分の弟子だったとすればなおさらである。ドイツ百科叢書の場合は、ある著作の書評者として、個人的に著者の友人ないし敵だとはっきりわかっている人物をそれと知りながら選ぶことはけっしてしないということが最初から必ず守るべき規則だった。『一般文芸新聞』の編集者たちもこの非常に公正な規則を掲げていたのであればよいのだが。シェリング、シュレーゲル両氏の厚かましきの場合、まさにこの点から先に挙げたこの編集者たちの窮境が生じているにちがいがなかった。そしてこの窮境はきつと、自分たちと一緒にひとつの町に住んでいる人々を個人的に大目に見たことが原因で、そして、『ルカによる福音書』第11章第8節[「しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。」]をこころに銘記していたために、そもそも起るはずのなかった事柄が彼らの機関にとって好ましくない方向に運ぶのを編集者たちがみすみす放っておいたために起こっていたのだ。2番と3番を読めば、2人の超越論的観念論者殿がいかにして『一般文芸新聞』を自分たちの意図のために利用したいと思っていたのか、彼らがどのような仕方でしつこく頼んでこの新聞で評判を得ようと努めたのか、そして、それゆえ自分たちの本を自分たちの親友だけに批評してもらいたいと思っていたことがわかる。本来は文献学者にして文芸愛好家であるが、哲学者としてはたんなる口先だけ達者な愚鈍な輩以外の何ものでもないフリードリ

次のように続けている。「自我の哲学者の学派にとってはもうずいぶん長い間」（彼らのつながりは、ニコライが両氏を弾劾している事由となる今述べたことが行われたり、両氏をこの学派に属するものと目されるようになった時期よりももっと前からある）「特有のこととなっていたのだが、この学派は、そうやって調達するしかない場合には」^{訳注2}（こん

ヒ・シュレーゲルがフィヒテの哲学関連のジャーナルの書評を書く。シェリングは兄のシュレーゲルの請願を受けて、寄稿者のメンバーにはまったく入っていなかった弟子のシュテフェンスに自分の自然哲学の書評を書いてもらう。A・W・シュレーゲルは、自分がシェークスピアを翻訳したものの書評を、これまた寄稿者ではなかったテークに書かせるよう要求する。このような知られていない人間について、彼がみずから何年も前に最初に『一般文芸新聞』の紹介書評新聞という公の場を出し抜けに偉大な詩人だと太鼓判を押そうと努めており、したがって彼は明らかにこの人間のことをえこひいきしていたのだ。これ以上にせこいまねなど考えられないではないか！」^{「傍点大文字」}。ここで「～番」と言われているものについては、本付録、訳注8、47頁、参照。Vgl. GA I/7, S. 429 Anm. 1. なお、*Neue allgemeine deutsche Bibliothek*（『新ドイツ百科叢書』）については、以降、NADBと略記する。

^{訳注2} Vgl. Friedlich Nicolai, *Ueber die Art wie vermittelt des transscendentalen Idealismus ein wirklich existirendes Wesen aus Principien konstruirt werden kann. Nebst merkwürdigen Proben der Wahrheitsliebe, reifen Ueberlegung, Bescheidenheit, Urbanität und gutgelaunten Großmuth des Stifters der neuesten Philosophie, von Friedlich Nicolai. [2 Motti] Eine Beylage zum LXI. Bande der N. Allg. D. Bibl.*, Berlin und Stettin 1801, S. 13 Anm. 「『新ドイツ百科叢書』の印刷物には、誤植で BESCHAFFEN となっている箇所がある。この点についてフィヒテ氏が『そんなごたごたと書いたくならないものを書き写さねばならないとは、何と忌まわしい仕事だろうか！』と賢明なコメントを付けている。ETWAS BESCHAFFEN [「(人が是非とも必要とするものをその人が手に入れるという) 結果を引き起こす、もたらす→何かを調達する」] という表現は動詞として使用されており、この場合には BEWIRKEN [「結果を引き起こす、もたらす」] とほぼ同じ意味であるが、この表現は確かにドイツの若干の州の方言ではまさに、まったく通常と異なる表現というわけではない。少なくとも確実に、シュレーゲル氏がフィヒテ氏の著作の序文で用いた[...] BEVORWORTUNG [「序文を書き添えること、序文として書き添えたもの」] という表現が甚だしくドイツ語らしくないというわけでもなければ、まったく判然としないというわけでもないように、ETWAS

なごたごとと書いたくだらないものを書き写さねばならないとは、[今私がやっていることは]何と忌まわしい仕事だろうか!)「自分たちの超越論的観念論を喧伝してくれるものを不正な手段で手に入れようと努めた。彼らはなるほど、あらゆる機会を捕らえて『ドイツ百科叢書』のことを軽蔑しているかのように装っていたが、しかしながら少なからず、この叢書を自分たちに好意的なものにするためにひそかに努力していたのである。(1)彼らは何とフィヒテ氏の学派を離れ[て独り立ちし]た寄稿者たちを推挙しようと試みたのだが、これはどうもまくいかなかったので、(2)哲学分野ではけっして書いたことのない『ドイツ百科叢書』の寄稿者を通じて、頼みもしないのに、彼らの意図にとって好都合な書評、ある記号^{訳注3}から十中八九の高い確率ではっきりわかるのだが、イエーナから出された書評を送ってよこそうと努めていた。『新ドイツ叢書』の当時の経営陣はこのような不作法な曲がったやり方に対して同じくらい十分に注意していたわけではなかった、云々。(3)さてそれでは実際に、『新ドイツ叢書』第18巻、355頁に掲載されている、フィヒテの全知識学の綱要に関する、そのような、ひそかに持ち込まれた書評をご参照願おう。そこでは、『ドイツ百科叢書』に頼みもしないのに紛れ込んでいたフィヒテ派の人物が抜け目なく以下のように書き起こしている^{訳注4}、云々。

BESCHAFFEN という表現も甚だしくドイツ語らしくないというわけでもなければ、まったく判然としないというわけでもない。しかしながら、私が実際に書いたのは、WENN ES NICHT ANDERS ZU BESCHICKEN WÄRE」[「それしか打つ手がないと思しき場合には」]であった」。Vgl. GA I/7, S. 429 f. Anm. 1'.

訳注 3 おそらく郵便の消印の記号であろう。

訳注 4 NADB, Bd. 56, S.159-160。「とはいえ、自我の哲学者の学派にとってはもうずいぶん長い間特有のこととなっていたのだが、この学派は、そうやって調達するしかない場合には、自分たちの超越論的観念論を喧伝してくれるものを不正な手段で手に入れようと努めた。[中略]したがって彼らはなるほど、あらゆる機会を捕らえて『ドイツ百科叢書』のことを軽蔑しているかのように装っていたが、これに劣らず、この叢書を自分たちに好意的なものにするためにひそかに努力していたのである。彼らは何とフィヒテ氏の学派を離れ[て独り立ちし]た寄稿者たち(シェリング氏の

ここで言われている自我の哲学者の学派の彼らとは一体だれのことなのか（分別のある読者はおそらく、いつ何時でも学派のことだけが目につくこの教師ぶった口を利く輩の表現を、私にとっても心底不快なものではあるが、ここでも以下でも簡潔のために私がそのまま改めずに使っていることを許してくれるだろう）。つまり、シェリングがこのような仕方で哲学することに公に関与した時期よりもさらにもっと前に、あのフィヒテの綱要の書評^{訳注5}が密かに持ち込まれる——ニコライ氏によれば、彼らがうまく事を運んだ最初の狼藉——よりももっと前に、それに先立つ挫折した数々の策謀によって時間も無駄にしていなければならないのだから明らかにもっとずっと前に、——この無駄にした時間においてニコライが（1）と（2）で弾劾していることをしたとここで言われている彼らとは一体だれのことなのか。当時『ドイツ百科叢書』のこと

431

学派出身のシュテフエンス氏のような関係の人物）を推挙しようと試みたのだが、これはどうもうまくいかなかったので、哲学分野ではけって書いたことのない『ドイツ百科叢書』の寄稿者（彼はもしかするとお人好しでその動機がわかっていなかったのかも知れない）を通じて、頼みもしないのに、彼らの意図にとって好都合な書評を送ってよこそうと努めていた。まあ、ある記号[おそらく郵便の消印の記号]から十中八九の高い確率ではっきりわかるのだが、イエーナから届いた書評なのである。『ドイツ百科叢書』の当時の経営陣はこのような不作法な曲がったやり方に対して同じくらい十分に注意していたわけではなかったので、こうした手口は、同じような2、3の書評が掲載されてしまって何となく違和感を呼び起こした後ではじめて発覚する始末であった。たとえば、唯一『新ドイツ百科叢書』第18巻、355頁にのみ掲載されている、そのような、ひそかに持ち込まれた書評を参照のこと。これはフィヒテの全知識学の綱要という、聴講者のためだけに印刷された仮綴じの小冊子に関する書評である。『ドイツ百科叢書』に頼みもしないのに紛れ込んでいたフィヒテ派の人物が非常に抜け目なく書き起しているさまをお読みいただきたい、[…][傍点大文字]。Vgl. GA I/7, S. 430 Anm. 2.

^{訳注5} 具体的には次の書評のこと。„Grundlage der gesammten Wissenschaftslehre, als Handschrift für seine Zuhörer, von Johann Gottlieb Fichte. Leipzig, bey Gabler. 1794.“ In: NADB, Bd. 18, S. 355-364. この書評には「Mm.」の署名がある。普段「Mm.」と署名していた書評者はカール・アウグスト・ベティガー（Karl August Böttiger）、1760年-1835年歿；ドイツの古典学者、考古学者。Vgl. GA I/7, S. 430 Anm. 3.

を軽蔑しているかのように装っていたとこで言われている自我学派の彼らとはだれのことなのか。――まちがもなく公には、彼らの〔軽蔑とは〕真逆の努力の方はひそかに行われていたのだから、したがって公にされた著作では（そうでなければどうしてニコライが実際にあの装いについて知りえたというのか）、すなわち、当時すでに公にされていた著作では自我の哲学者であることを示していたとこで言われている彼らとはだれのことなのか。だれが彼ら、こで言われている彼らたりうるのだろうか。ニコライはこの時代の中から私自身以外で知識学の体系に賛成の意を表明している物書きをだれでもいいから私に対して示せるというのだろうか。彼はあの時点から私と私の聴講者以外で、その中には物書きはおらず、おそらくもっぱら私を通じて文献とのつながりを保つことしかできなかったであろう聴講者以外でだれでもいいからある人物のことを彼の言う自我学派に属するものとみなすことができるのだろうか。

ニコライは私が彼によって申し立てられたひそかな策謀の首謀者であるか、少なくともその策謀に一枚かんでいたと吹き込みたいのだろうか。彼はおそらくきっとそうしたいと思っているのであろう。なぜなら、彼の弾効はやはりきつととにかくだれかを的にしていなければならないわけだし、もっと前に名指しで厳しい批判を浴びている人物のなかのひとりに向けられていなければならないわけであり、そうした事実がもっと前の時期にあったとされていることに鑑みて、そうした人物には当たらない、シェリング教授殿、両シュレーゲル教授殿、そしてティーク氏が狙われているわけではないのだから、きっとまだ残っている唯一の人物、すなわち私を標的にしたものでなければならないからである。この弾効の脈絡を押さえてこの箇所を読んでいる読者もだれもがこの弾効を私に結びつけることであろう。このことをニコライは予測しているはずだった。そう予測し、実際にも今あるように語ったわけだから、そうなってほしいと意図しているにちがいがなかった。あるいは、あの弾効が私に結びつけられることを望んでいなかったのだとすれば、すなわち、特定の人間に的に絞られることがないように、ただ一般的にこれといった当たりを付けずに弾効したいと思っていただけなのだとすれば、彼はきっと、私が個人としてあの騒ぎに一枚かんでいたりその騒ぎについて知っていたり等々と信じるだけの根拠がなくて私のことを指しているわけではな

いのだ、とはっきりと表明していたことだろう。

ニコライがやったことは後者ではなかった。したがって彼は弾劾が私に結びつけられることを望んでいたのだ。

彼が私のことを弾劾している事由となるふるまいは、ニコライ自身が十分に意識しているところや述べていることや彼自身の感覚からすれば、甚だしく軽蔑すべき下劣なふるまいである。彼は読者にも同じようにみなしてほしいと思い、そこで書かれているような表現を用いているのだ。彼は、不正な手段での入手、不作法な曲がったやり方、ひそかな持ち込み [密輸入]、そして、公には軽蔑しているかのように装っているものをひそかに自分たちに好意的なものにする試み、と語っている。 432

この同じふるまいは、私の把握や、こうした人々から尊敬されることに価値があると私が思っている読者全員の把握では、ニコライが理解し把握できている以上にもっと計り知れないくらい下劣で、軽蔑すべきことであり、おまけに愚かなことである。なぜなら、私と、私が共に活動したり影響を与えたいと願うすべての人々とはまったくもって尊敬に値しないと思っているのが、低俗な学術新聞とその判断であり、そのような判断をありがたがる者の判断だからである。

しかしながら、特に『ドイツ百科叢書』について言えば、ポーン^{訳注6}の出版社で発行されているものであろうと、ニコライの出版社で発行されているものであろうと、私はこれを軽蔑しているかのように装っているのではなくて、実際に軽蔑しているのであり、その一般的傾向ゆえにまったくもって大まじめに、私が判断の責を負ってしかるべき特別の分野、すなわち哲学の分野に関して軽蔑しているのである^{原注(1)}。

この同じ軽蔑の念を、この点に関する考え方を知る機会に恵まれたすべての人が例外なく抱くことを私は目の当たりにした。ところでニコライの望んでいることはというと、私が、これが軽蔑すべきものであることは一般的に妥当する事柄に属するとされるこの雑誌を、私に好意的なものにしようと努めていたのだと、みなに信じられることなのだ。 433

^{訳注 6} カール・エルンスト・ポーン、(Karl Ernst Bohn), 1794年-1827年歿；1793年から1800年まで『新ドイツ百科叢書』の編集者。フィヒテは1796年に彼と公に論争をした。Vgl. GA I/3, S. 285-290; GA I/7, S. 430 Anm. 3.

他の人も言っているが特に私が言ったことは、そのようなふるまいはニコライが把握できている以上に愚かなことでもあろう、ということである。私が当時滞在していた地域とものと南のドイツでは、『ドイツ百科叢書』に対する軽蔑は、ごく普通の読者の場合でさえ、先入観にさえなっていた。万一この叢書にいまだに目を通すとすれば、みずから自分が無意味であることに気づき始めている陳腐にして無意味な者が繰り返すおかしな言い回しやこねくり回した表現をおもしろがるために、食後の腹ごなしの時間に目を通すといったありさまなのである。それらの地域に暮らしている者は、この叢書で称賛を受けることはありがたくない推薦状を出されることだとみなしている。この雑誌をありがたがっているのはもう、暗闇に包まれたドイツの若干の州しかないのだ。そこは総じて言えば私たちのところの40年前の教育段階にあり、新約聖書の一節では悪魔について実際に話題になっているのかいないのかについて、

434 いまだに原典に基づいた報告を受けたいと願っていたり、かけがえのないプロテスタントの思想の自由がイエズス会士たちの策謀によってくつがえされる恐怖に対して安心を求めているのである。

したがって、ニコライが私を弾劾する事由となっているふるまいは、下劣で、軽蔑すべきで、愚かなことである。彼は自分の弾劾を正当化する証拠を示すために何も挙げていない。私は提示されていないある証明に対する以下のような論駁を提供することができる。— 私はまじめに再びニコライの話に戻りたくないので、名誉を重んずる読者のみなさんに次のことを保証することで満足しなければならない。弾劾内容はすべて完全なでっち上げである。私はけっして、『ドイツ百科叢書』の寄稿者として私に知られていたり、この叢書の編集にかかわっているものと周知しているどんな人間とも友好的なつき合いや結びつきを持っていなかった。私は『ドイツ百科叢書』の判断をまったく気に懸けていなかったし、これらの判断に対して影響力を保持するためにほんのわずかなことすら何もしなかった。—

私はこの雑誌の当時の発行者であるポーン氏を叱った^{訳注7}し、その理由は、彼が低能で、私に宛てた諸々の匿名の誹謗文書をあの雑誌の紹介

^{訳注7} 本付録、訳注6、45頁、参照。

書評新聞に掲載することを許したあげく、私がこの件について照会したときに何について話しているのかわからなかったからだが、彼に好意的な反応を求めてこれを引き出すために叱ったわけではないことはやはりまちがいない。

今や、ニコライに対して公の場で自分の弾劾を正当化する証拠を示すように仕向けることは、私が断言していることを信用していない読者の務めである。私が確実にわかっているのは、彼はでっち上げと嘘を並べることしかできないだろうということである。こうしたでっち上げや嘘が公衆の面前で彼と絡むことなく彼を市民の法廷に訴え、この法廷に判決を委ねることができる類のものであればよいのだが。

それにしても、ニコライが3番^{訳注8}を挙げて言っているように、ニコライが思っているような、私の『基礎』をほめたたえる書評が『新ドイツ叢書』に掲載されたというのはそもそも事実ではないのではないか。1番と2番に対しては、ニコライにはあるいは証拠がまったくないのかも知れないが、もしかすると3番から彼の周知の判読による本文批判によってそのように推論し、ためらわずに彼の推論を歴史的事実だと言いついていたのかも知れない。

何という推論だろう！ 私の思考内容をただだんにただちに放り出したりしないでさらによく考えてみるという紹介書評が、新しいものはすべてあっさりとして放り出すという根本的格率を有する『新ドイツ叢書』に迷い込んだからといって、それは根っからのフィヒテ派の人物の手によるものにちがいないとか、イエーナで制作されたものに決まっていると、まちがいでなく私がこの投稿の片棒を担いでいるのだとか、きっと私がもうずっと以前から似たような試みをいたずらに繰り返してきたのだ、と言えるのか。

次のようなことだけは可能性すらないとでも言うのだろうか。あの紹介書評を書いた学識者はイエーナに暮らしていたわけではなく、私のことを個人的に知っていたわけでもまったくなく、今まで私のことを個人

^{訳注8} 本書の「序論」の訳注4（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第17号、2018年3月、107頁）に挙げられている8つの書評の3）のこと。以下、「～番」とあるのはそこに挙げられている書評の番号を指す。

的には知らず、紹介書評で取り上げられた著作が彼にもたらしたもの以外には私に何の関心も持つことはありえなかった、それどころか私もこの人物の存在をあの紹介書評によってはじめて知った、などということ。以下のことはありえないと言うのだろうか。この学識者がこの紹介書評を、編集者のだれかからの注文とは一切かわりなく、もっぱら事柄に対する関心に基づいて、書評によって著者の後押しができればという善意で書き、これをまずは実際に刊行されている別の学術誌に投稿したのであり、しかしながらこれは、たとえばニコライもそう認識していたであろうように、たんなるつまらない要約だとみなされたのでその学術誌から送り返されることになり、そこではじめて（ニコライは事の経緯を知っているかも知れないが、私は知らない）、書かれたことが無駄にならないようにと『新ドイツ叢書』の元に届けられたわけだが、私はあの紹介書評に関するこのような後者の運命についてそれ以前にはまったく知らなかったし聞いてもおらず、これが『新ドイツ叢書』の先に挙げた分冊に掲載されたのを見つけたときにニコライと同じような違和感を覚えた、などということ。このようなことも同じようにありえないと言うのだろうか。そういうことなら私は率直にこうぶちまけて言うべきなのだろうか。たまたま私はこのことを、いつもはつねに非常によく事情に通じているニコライよりもよく知っているのだ、可能性のあることとして仮定されていたことが実際の事実なのである、すなわち、私が上で申し述べていたのとまさに同じようなことが起こったのである^{訳注9}、

訳注9 アカデミー版全集の編者によると、ベティガーはフィヒテのことを寄宿学校ポルテのときからずっと個人的に知っていたようで、件の書評は別の人間によって執筆され、ベティガーが『ドイツ百科叢書』に持ち込んだのだと想定されている。書評自体の質はというと、この編者も指摘しているように、『全知識学の基礎』の理論的部門のジンテーゼの帰結の要点をなぞるように繰り返しているばかりである。Vgl. Günther Ost, *Friedrich Nicolais Allgemeine Deutsche Bibliothek*, Berlin 1928, S.109 f. Anm. 「ボーンは1979年1月3日に[書簡で]ニコライが注意したことに答えて、「Mm.」とはベティガーのことであり、彼は依頼していない書評ばかり送ってよこす人物で、『言うまでもなくそういった書評は彼に戻されることになるのですが、フィヒテの知識学に関するもの(NADB, Bd. 18, S. 355 ff.)はくぐり抜けて掲載されて…しまったのです』と述べていた。

と。だがおそらくニコライは、あの紹介書評が哲学分野ではけっして書いたことのない『ドイツ百科叢書』の寄稿者で、したがって彼が非常によく知っているはずの人物によって投稿されたことを知っているのだ。ということは、この寄稿者に関して彼が知っていることは私よりも多いのである。したがって彼は、自分の綿密で重要な探究〔あの紹介書評が掲載された経緯の解明〕の糸口をつけるために確たる証拠となるポイントを押さえていたわけだ。やはり彼は、かなりの紙幅を割いて^{原注(2)} 彼が読者に伝えている内容は、徹底した報告ができるように自分がどれくらい遠方の人間と手紙のやり取りをしているのかとか、どこで最も軽い釣り針が制作されていたのか^{訳注10}、といったことであるが、そんな彼は

436

そして〔『新ドイツ百科叢書』の編集者である〕エルシュ（Ersch）は、1797年7月19日に〔書簡で〕、「Bttg.」とその協力者である『W [ヴァイマル?]の在野の学者を丁重にはあるがきっぱりと退け』たと書いていた。Vgl. GA I/7, S. 435 Anm. 8.

^{訳注10} 『ドイツ・スイス旅行記』第11巻の「序文」(S. LXXXIV ff.)、参照。「私は、[...] まったくなじみがなく新しいと思われるものについて聞いたり読んだりした場合には、詳しく尋ねることにしている。なぜなら、伝えられている情報がどれほどなじみのないものだとしても、ときとして、割合根拠のある話ということもありうるからであり、何が真実か知るためには調査しなければならないからである。だから、こうした驚くほど小さい釣り針や魚でも私の目を引くのである。そういうわけで、私はオーストリアの2人の情報提供者宛に手紙を書いたが、返事がなかなか来なかったので、ウィーン在住のとても理解のある親切な人物を頼ることにしたところ、このたび彼の厚意で、ヴァイトホーフェンで制作されたすべての鉄製品の価格表とともに、「この地には価格表に載っているものよりも小さい釣り針があるが、これらは美術品ではあるものの、実用品ではない」という暫定的な情報が手に入った。〔中略〕私はこの件について芸術を解する人々と話し、私の働きかけで、さまざまな工場宛てに書簡がしたためられた。〔中略〕そうこうしているうちに、私は軍事顧問官兼税務顧問官のエヴァースマン氏のご厚意により、イーザーローン近郊のヴェーリンクハウゼンで[...] 実地調査を行い、美術品ということであれば、ヘルマン氏が賞賛したヴァイトホーフェンの工場の釣り針の精巧さのレベルに到達することはおろか、上回ることも可能なことを自分の目で確認することができた。しかしながら、それは鋼線の釣り針であって鉄線の釣り針ではないことに注意されたい。〔中略〕見本は私の手にある。細工の細

やはりこの問題においても〔オーストリア在住の2人の情報提供者に送った〕2通の手紙のことを後悔しなかったはずはなからう！ あるいは彼はもしかすると、このような対象〔釣り針〕についても思われている以上によく知っていたのだろうか。また、他の学術誌がしかも私自身の勧めにしたがって掲載を断ったものを、彼が再び受け入れた『ドイツ百科叢書』が好ましいものだと受け取ってしまったことをさらすのは、彼にとっては都合の悪いことだったというだけのことなのだろうか。

2

ニコライの第二の名誉毀損に移ろう。彼が私を弾劾している(176頁)事由は、「私の立てた命題から帰結としてどのようなことが明らかに導き出されるのか私に対して示した」ある敵対者に関して、やくざ者のすること、悪ガキのすること、といった言葉が私の口を吐いたことである^{訳注11}。

かさは感嘆に値するものではあるが、同時に、吹けば飛ぶような釣り針で魚を釣ることができるなどと想像できる者がいれば、それがいかに嘲笑すべきことかが見た目ではっきりとわかる。」。Vgl. GA I/7, S. 420 Anm. 5, S. 436 Anm. 10.

^{訳注11} NADB, Bd. 56, S.176. 「彼〔すなわち、フィヒテ〕に対して、彼の推理には整合性を欠く部分がいくつもあり、この推理を整合的なものとみなしたければ、そこからでたための整合性が結果的に生じてしまうということが、こんこんと説いて含めるようにしたためられているのだ。——彼の目は真っ赤に燃え、中途半端な頭脳、やくざ者のすること、悪ガキのすること、といった言葉が彼の口を吐くのだ！ 最初の言葉は、シェリング氏もたびたび敵対者を名指すために用いている。フィヒテに敵対する者のうちで、彼の立てた命題から帰結としてどのようなことが明らかに導き出されるのか彼に対して示した者につけられた、残り2つの名誉あるあだ名は、フィヒテとニートハマーの『哲学ジャーナル』、1798年、第8号、386頁に見られる。『哲学ジャーナル』について、「1798年、第8号」とあるが実際には「1798年の第8分冊」であり、1798年はまず第8巻(全4分冊)が発行されているので、正確には第9巻第4分冊である。ただし、ここでニコライによって指摘されているのは、フィヒテの「私的書簡から」であり、そこには「(1800年1月の)」とあるので、実際の発行は1800年だと思われる。Vgl. GA I/7, S. 436 Anm. 1.

ニコライ自身がこうしたことを書くことによって私を弾劾している事由の中身を把握しているのかどうか知らないが、私は把握していないのではないかと疑っている。彼はこのような罵詈雑言を一緒くたにすると、これと別の告発、すなわち、私がある敵対者たちについて中途半端な頭脳の持ち主だと言ったという告発とをまとめて同時に組上に載せるのだ。彼にはこの後の発言とあの前の発言がほぼ同じものにも思えるのだろうか。

彼から見てどうであろうと、問題なのは、当の彼が私のことをどういうふうに思っているかではなく、彼が他人に私のことをどういうふうに思わせたいのかということである。公衆のうちでこうした人々から尊敬されることが私にとって大切だと思われる層と私自身との見るところでは、この後の発言とあの前の発言は同じものではない。

出版物による厳しい批判のお返しに敵対者個人の道徳的名誉を毀損することや、根拠を挙げていることに対してやくざ者のすること、悪ガキのすることと言うことは、私の判断では、願わくは分別があつて名誉を重んずるすべての人の判断でも、激烈な馬鹿か、陰険で悪意に満ちた真理の敵にして悪人のふるまいに過ぎないのである。

その敵対者^{訳注12}がせめて実際に私の[立てた]命題から推論を展開してくれてさえいれば、仮に彼がこうした命題を誤って理解するか、そうした命題からまちがった結論を引き出して、私が彼の誤解ないし論過をはっきりと示すことができたとしても、私はなるほど彼に対して理解できていなかったり不整合であつたりといったような理解力不足があることを責めはしたであろうが、彼が自分の主張していることを自分ではま

^{訳注12} ヨーハン・ハインリヒ・ゴトリープ・ホイジンガー (Johann Heinrich Gottlieb Heusinger), 1766年-1837年歿; 1795年-1797年までイエーナ・アカデミーの私講師(哲学)のこと。無神論論争をきっかけにフィヒテに異を唱える、次の2冊の本を執筆した。『イエーナのフィヒテ教授殿の観念論的・無神論的体系について』(Ueber das idealistisch=atheistische System des Herrn Professor Fichte in Jena, Dresden und Gotha 1799), 『自身の宗教理論への私の抗議に対するフィヒテ氏の応答に答えて』(Meine Antwort auf Herrn Fichte's Erwiderung meiner Einwürfe gegen seine Religionstheorie, Gotha 1800)。Vgl. GA I/7, S. 437 Anm. 2.

じめに信じ込んでいるのだとみなせる可能性がほんのわずかでも残っているかぎり、やくざ者のすることとか悪ガキのすることなどと言ったりすることはけっしてなかっただろう。

さて、この件については事情は一体どのようになっているのだろうか。幸いこのいざごぎにおいては、ニコライが自分の弾劾の根拠としている事実が明らかにされている。彼はその箇所を正確に明記しているのだ(『哲学ジャーナル』, 1798年, 第8分冊, 386頁^{訳注13})。それではその箇所がどのような文脈に置かれているのか紹介しよう。

私は指摘されているテキストより前の385頁でこう言っている^{訳注14}。
 「私は、たとえばホイジンガー氏が私の言葉に関してしているような偽りで固めた曲解をされて当然というわけでもないし、そうされるきっかけを作っているわけでもない」。そして、注でこう付け加えている。「私は(同年刊行の『哲学ジャーナル』[第8巻]第1分冊所載の私の論文である「道徳的^{訳注15}世界統治に対する私たちの信仰の根拠について」の10頁で)2つの思考内容の必然的整合性を表現するためにこう述べている。「私自身の存在を否定したくなければ、私はあの(道徳性という)目的の実現を目指さねばならない」。すると、この命題を分析しなければならなくなり、それゆえこの命題を次の頁で分析の必要がない徴表を省略しながらこんなふうに縮約して繰り返すのである。「私は端的に道徳性という目的を立てねばならない、ということは、かくかくしかじかである」。したがって、この言い方は次の言い方と同じなのだ。「直角三角形では、斜辺の二乗は直角を挟む二辺それぞれの二乗を足したものと等しい。三角形では、斜辺の二乗は云々、ということは、かくかくしかじかである」。

^{訳注13} SW版ではここに編者の注がつけられている(SW VIII, S. 69)。「SW V, S. 394. — 以下で言及されている注については、とっくの昔に忘れられていた論争的な諸関係にかかわるものであるため、そこ[SW V, S. 394]ではカットされている」。

^{訳注14} 『ドイツ学術協会哲学ジャーナル』第9巻第4分冊、「(1800年1月の)私的書簡から」(Aus einem Privatschreiben (im Jänner 1800.)), 385-386頁(GA I/6, S. 385 f.)。

^{訳注15} 『哲学ジャーナル』では「神の」。

—しかしながら、ホイジンガー氏は^{原注(3)} 後者の命題表現が直接的であるとしてこれに準拠して、私の全理論をこの無条件に定立された〈ねばならない〉から説明することによって、(私の書いたものを一文でも読んだ者ならだれでも、意志の自由に基づいて私の全思考が築かれていることを知っているはずなので、)私のことを運命論者として譴責するとともに、私に従えば道徳的秩序がそれ自体で^{訳注16} どのように形成されるのか、また、私が歴然とした無神論者であることを自分でどれほど十分に意識しているのか、かなりはっきりと詳しく述べている。普通の生活では、名誉を重んずる人はだれしも、そのような態度をやくざ者のすることとか悪ガキのすることとか嘘と呼ぶ。このような態度を文芸の世界ではどのように呼べばよいのだろうか。これが私の書いたことである。分別があり、かつ、名誉を重んじる読者には、以下の問いに自分でお答え願いたい。

(1) このようなことは、新しい哲学の文献に精通している者ならだれでも私が昔からきわめて強くそれに対して反対の意を表明していたことを知っているにちがひなく、ホイジンガー氏もきっと知っていた意見を私になすりつけるために私が条件つきで立てた命題が無条件の命題に変えられてしまった場合には、ニコライが呼んでいるように、私が立てた命題から推論していると呼ばれるのだろうか。要するに、推論の話ではなくて、曲解やでっち上げの問題なのだ。

(2) このような曲解は、著者が敵対者に向けられた弾劾(無神論という弾劾)を根拠のあるものと実証する目的を最初からすぐに明らかにしており^{訳注17}、また、このような手段によってのみこのような目的が達成されうる場合には、誤ってではなく、よくわかったうえでよく考えてなされたとみなさざるを得ないのではないか。

(3) 市民生活における似たような態度はどのように呼ばれるのだろうか。私がたとえば会話中に「ニコライが根っこから歪んだ錯乱した頭

^{訳注16} 「私的書簡から」では、「おのずから」。

^{訳注17} フィヒテに異を唱えるホイジンガーの最初の本のタイトルを参照。本付録、訳注12、51頁、参照。Vgl. GA I/7, S. 437 Anm. 2; S. 438 Anm. 5.

脳の持ち主ではないのだとすれば、彼は悪意に満ちた悪人ということになる」と言ったとしたらどうだろう。そうすると[注目されることによって]ニコライの価値が今より上がることになるだろう。するとだれかが彼のところに向向いて、私フィヒテが彼ニコライのことを悪意に満ちた悪人だと言っていたと話することだろう。そしてこのような告げ口をする者は、告発という公に認められた目的でそうすることだろう。この告発によって私の性格に対して消し去ることのできない烙印が押されることになったのであり、この告発が実を結んで私のキャリアが狂わされてしまったのである。だとすれば、このような態度の特徴を表すのに、嘘とかやくぎ者のすることとか悪ガキのすることと名づける以外のどのような方法があり得るのだろうか。

(4)「市民生活においてはこのようなことはやくぎ者のすることとか悪ガキのすることとか嘘と呼ばれているが、文芸の世界ではどのように呼ばばよいのだろうか」という問いは、「文芸の世界でも同じように呼ばばよいのであり、したがって私はこのようなことについてそう呼びたい」という同型の命題と同じなのだろうか。私は確かに、私が引き下がりがっているのだれかに思われることがけっしてないようにしているし、私は無論のこと、もっぱら文芸における誠実さに関してのみ市民的名誉に関するのと同様の固定的で広まった一般的意見があるのだとすれば、文芸の世界でもそれはそう呼ばれるべきだと確信している。もちろん私は、このホイジンガー氏が非常に下劣なふるまいをしたと確信しているし、ためらわずにこのことを公に説明する。

(5)ニコライのふるまいについて。彼が私たちの発行している『哲学ジャーナル』のページ番号さえも覚えているほどの計り知れない記憶力を持っているわけではないのならば、彼は、先に挙げた、彼が正しく引用している箇所を目の前で広げて確かめたはずであり、それにもかかわらず以下のように文書にすることができたのである。私の立てた命題から帰結としてどのようなことが導き出されるのかをある敵対者が私に対して示したことについて、やくぎ者のすること、悪ガキのすること、といった言葉が私の口を吐いた、と。——このようなニコライのふるまいを評価し名づけることを、私はもっぱら名誉を重んじる読者だけに委ねる。

でっち上げられた事実に基づくこのようなニコライの名誉毀損についてはここまでにしておこう。(154頁^{訳注18}と177頁^{訳注19}で)、私がイエーナ大学の教職を辞するにあたって取った態度について下した彼の判断を、私は沈黙を守って無視している。彼はこの場合にも、けっして私のものではなかった感情や心情が私にあるとみなしているが、少なくとも

^{訳注18} NADB, Bd. 56, S. 154. 「シュレーゲル氏の『一般芸芸新聞』に対するこのようなふるまいは、彼の偉大な師にしてお手本であるところのフィヒテ氏のイエーナ大学に対するふるまいと非常に似ている。フィヒテ氏はさらに、彼に対して反論したり、彼のことを正しくないと叱ったりする者はおそらくだれひとりとしていないだろうと信じ込んでいた。そしてこのような信念に基づいて彼は、そんなことをすればイエーナを離れることになるだろうと脅迫した。そして、自分自身が重要だという思いでいっぱいになっている彼は、そんなことになったらイエーナ大学は持たないと信じて疑うことはなかったのである。彼は大学を離れた。しかも、いくらかの悪意をもって (de mauvaise grace)。そして大学はフィヒテ氏がいなくてもまったく十分に持ちこたえており、それどころか、たとえばシェリング氏が再び戻ってこなくても、そのうえより小さな一門 (minor gens) に属すすべての批判哲学者 (criticus) や観念論者 (idealista)、すなわち、ニートハマーの一門やフエアメーレンの一門などといった小さな人々が別の滞在地を選んだとしても、イエーナ大学は持ちこたえるだろう (このように書いているのは、フィヒテ氏が旅立つ前に、彼が断言しているところでは、すべての観念論者が脅したそうであるからである)」。Vgl. GA I/7, S. 439 Anm. 6.

^{訳注19} NADB, Bd. 56, S. 178-179. 「彼 [すなわち、フィヒテ] はイエーナを離れねばならないことをひどく恐れており、そして、その地で、観念論および秩序づける存在者のいない道徳的世界秩序が神に関する唯一正しい学説で、これに反するような神に関する学説があるとすればそれはすべて偶像崇拜であろう、と自分の学生に講じるのがもはやなくなってしまわざるを得ないことにおののいていたが、一体どうしてこんなことになったのだろうか。フィヒテ氏がイエーナで講義を行うことがもはやなくなってしまわざるを得ないということは、お高くともった彼の哲学が子供じみた言葉遊びに過ぎないわけではないのだとすれば、やはりあくまで、彼の思考のなかだけの話だったのである。この偉大な哲学者である彼が彼自身の思考について非常に自信を失い不満を覚え、まず第一に、観念論者をすべて引き連れてイエーナを離れるぞと言って (もちろん彼の思考のなかだけでも存在する) 枢密顧問官フォークトをますますもって非常に尊大な態度で脅し、次いでまさに彼の産物であるこの人物に宛て

明らかに誤った事実をでっち上げているわけではないからである。ニコライの判断は私にとってあまりにも価値のないものであり、あまりにも軽蔑すべきものなので、これに対して自己弁護したり、こうした人々から尊敬されることが私にとって大切だと思えるようなだれかがこのような判断に与するなど想定したりするべきだとは思われないのである。もしかすると、あの事柄についてよく知られるようになったこと以外に、知られないままになっている他の事情^{訳注20}がまだあるかも知れない。そしてそれらの事情によって、その際にとった私のふるまいについて、ニコライがこのようなふるまいのそうした面を明るみに出すのが当を得ていると思っているのとは別の面に光を当てることになるかも知れない。しかしながら、ニコライはまさにこうしたことで私に釈明を求めることがありそうもない人間なのだ。

432 原注

- (1) それにどのようにすれば私はこの叢書を軽蔑する以外のことができようか。この叢書の精神の側〔ニコライ〕について軽蔑しかできない

た手紙においてイェーナに留まろうと弱気なことを申し出たなどということはありませんだろ！ というのも、フィヒテ氏は、イェーナが彼の外には実際には現存しないということを十分すぎるほどわかっていたのだ。彼はやはり、当の彼自身がどこかに彼とは独立に現存する高貴な、イェーナ大学を養育している者 (Nutritor) たちと彼との結びつきの連なりを構成する一要素であるなどとけって信じていたはずはないのである。彼らは彼を戒告処分をしたいと思っていたわけだが、このような当然の報いである戒告によって彼が自分のことをきわめて強く弾圧されていると思い、この戒告に関して非常におしつけなふるまいをしたのは一体どうしてなのか。彼の哲学からすれば、戒告は、たとえそれがどんなに著しく激しいものであったとしても、彼自身が作り出したものだったのだから！」ニコライは、フィヒテがフォークトに宛てた第二の書簡に言及しながら、事実痛い点に触れていた。フィヒテがラインホルトに宛てた1799年9月28日付の書簡 (GA III/4, S. 91, Zcile 20 ff.) を参照。Vgl. GA I/7, S. 439 f. Anm. 7.

^{訳注20} フィヒテがシェリングに宛てた1802年1月15日付の書簡 (GA III/5, S. 109, Zeile 25 ff.) を参照。Vgl. GA I/7, S. 440 Anm. 8.

いことは自明のことである、書評者たちにしてもそうだろう。彼らには、誤解し、曲解し、おまけに論駁しているふりをして偉ぶるというニコライばりの芸術的本能すら与えられていたわけではない。授業で習ったことを暗唱させられていてこれを習得することがなかった小学生のように、言われたことを理解し明らかにすることがやはりまったくできないのではないか^{訳注21} と思ってただ立ちつくし、そう白状し、嘆いているのが彼らである。哲学関連の著作はやはり最低限、哲学者によって（哲学者とはどのようなものことだろう、おそらくこの叢書の書評者たちなのではないか、哲学者とは『ドイツ百科叢書』の哲学の分野で書評を書く人間のことなのではないか）、繰り返すが、哲学者によって理解されうる程度には判明でなければならぬのではないかとこぼし、それにもかかわらずやはり自分たちがわからないと認めているものに対する嫌悪感を隠すことができず、最終的には、この叢書の編集者とその読者、そして自分自身にとって慰めとなる、「いずれそう遅くない時期に、絶望的状况にあるこの最新の哲学が論駁されたものとなる時が来るだろう」という捨て台詞を残して立ち去ることからして、彼らのことを軽蔑する以外の道はなかろう。この書評者たちは、引用元にある誤植をそのまま印刷に回してしまって、あとから奇妙な表現を不審に思うレベルの博識ぶりなのだから。先頃も、ハイデンライヒの『ウェスタ』から孫引きされた私の著作の一文がそんなふうにそのまま印刷に回されている。「婚姻関係は異性どうしの成人の生存の群れ (Masse) (私のテキストでは「様式」 (Weise) となっている。私の『自然法論』第2部, 174頁^{訳注22}を参照), しかも自然によって要求された生存の群れなのである^{訳注23}」。無論のこと、奇妙な表現

^{訳注21} たとえば, NADB, Bd. 61, S. 344-346 所載のフィヒテの『道徳論の体系』の書評を参照。Vgl. GA I/7, S. 432 Anm. 5.

^{訳注22} SW 版では、「第3巻, 316頁 [第2部, 174頁]」となっている (SW VIII, S. 64)。[日本語版全集, 第6巻, 370頁]

^{訳注23} カール・ハインリヒ・ハイデンライヒ (Karl Heinrich Heydenreich), 1764年-1801年歿; ライプツィヒ大学教授 (哲学)。『ウェスタ — 生, とりわけ家庭生活の哲学小編集 —』 (Vesta. Kleine Schriften zur Philosophie des Lebens, besonders des häuslichen, Leipzig 1798) の第1巻,

方法だと括弧に入れて公言しているのは書評者である。

433 『新ドイツ叢書』のごく最近の号をばらばらめくって哲学関係の書評に目を通してみようと思っている者はだれでも上に挙げた表現にぶつかるだろう。

さて確かにニコライは、あの叢書の編集を再び引き継ぐ際にこれまでの書評者をそのまま使い続けることを約束したのだから、(実際のところもはや他の人材の獲得は無理だろう,) あの書評者たちはドイツの第一線の作家に数え入れてしかるべきだと断言するだろう。彼が『イェーナ文芸新聞』に掲載されたシェリングの『世界霊』の書評を書いた者について同じことを請け合っているように。そして彼はおそらくあまりに心が寛いので、シェリングの場合と同様に私のことも自分のことのように心の底から、私がこうした連中について単純な小学生について話すように語っていることを恥ずかしく思うのだろう。無論のこと、事実私はそうしているのだが。

435 (2) 彼の旅行書の第11巻の序文^{訳注24}を参照。

438 (3) 彼の著作、『フィヒテ教授殿の観念論的・無神論的体系について』において。

(第2付録以降は次号以降に続く)

14頁。「私たちは以下の点で完全に意見が一致している。結婚は、彼の[すなわち、フィヒテの]言葉で語るなら、けっして発明されたしきりではないし、なんら恣意的な制度でもなく、合一している自然と理性によって必然的にかつ完全に規定された相互関係であり、成人した両性の生存の群れ、しかも最も本来的で自然によって要求された生存の群れなのである」[日本語版全集、第6巻、370頁と371頁を参照。引用順は逆である]。NADB, Bd. 52, St. 2, H. 6, S. 343-352掲載の『ウエスタ』第1巻の書評を執筆したのは次の者。カール・フリードリヒ・ポッケルス (Karl Friedrich Pockels), 1757年-1814年歿; 公爵領ブラウンシュヴァイク州ゲッティンゲン近郊ノルトハイムの評議員。引用部分については347頁を参照。ポッケルスはそこに次のようなコメントを付けている。「これらはフィヒテ自身によって多少奇異なかたちでなされた表現である」。Vgl. GA I/7, S. 432 f. Anm. 6.

^{訳注24} 『ドイツ・スイス旅行記』第11巻の「序文」(S. XXIX fg.)。